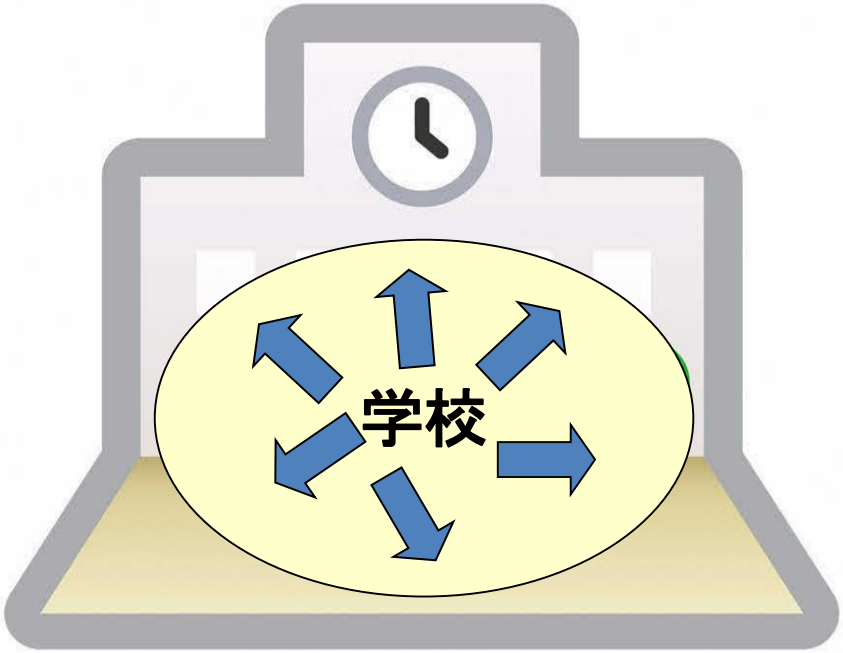
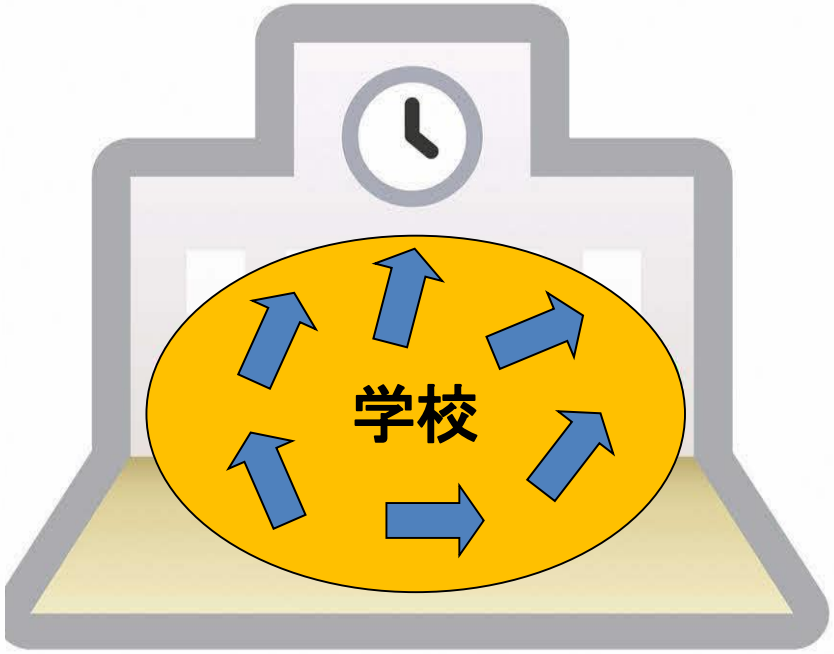
２　持続可能な取組にするために
SPARK委員会の活動と役割

～カリキュラム・マネジメントの必要性～

SPARK（スパーク）とは
　火花、ひらめき、活気、才気という意味で、次の頭文字を取った名称です。
　Student , **P**artnership , **A**ctive-learning , **R**esearch , sapporo-**K**ita

学校という組織





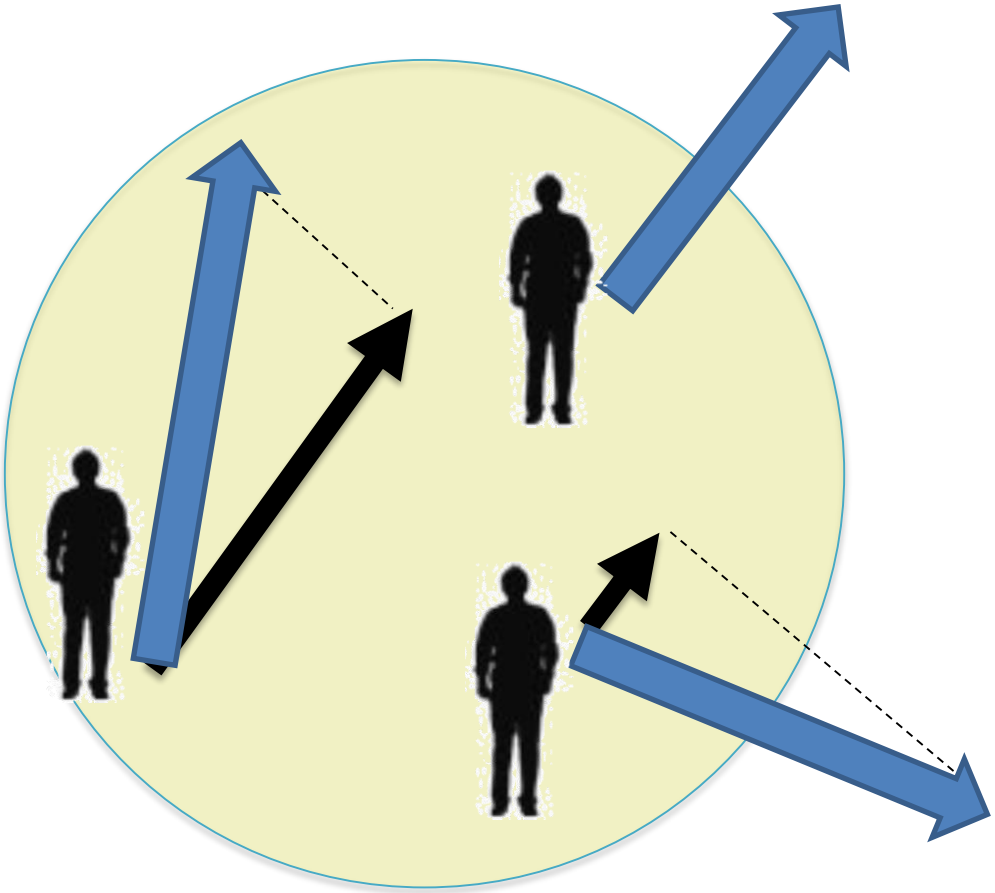
あえてベクトルを
揃えようとせず、

平均としてある方向を
向いていればよい。

生徒も教員も多様性が大切

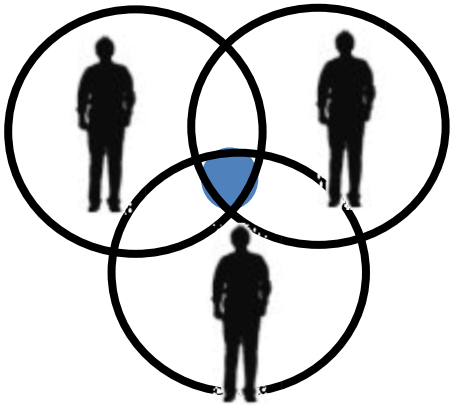
みらいの職員室（文部科学省）参照
https://mirashoku.mext.go.jp/activities/post_010.html

学校としての
方向性



方向は異なっていても、
共有（黒矢印）部分は存在する。

コンセンサス
（欧米的）



思いの共有化
（日本的）

SPARK委員会の担う役割

＜ユニット＞
（SPARK）
・校内事例U
・校内研修U
・高大接続U
・ICT U
（以下教務部）
・探究U
・教育課程U

コーディネータ　２名
ファシリテータ　７名
（校内公募制　R2年度）

校長・副校長・教頭

＜情報開示＞
・事務連絡シート
・情報共有シート

カリキュラムマネジメント

分掌・学年横断的調整

個別の取組の見える化と関連付け

校内研修

校内事例の掌握と支援

SPARK通信の発行

道外視察の調整

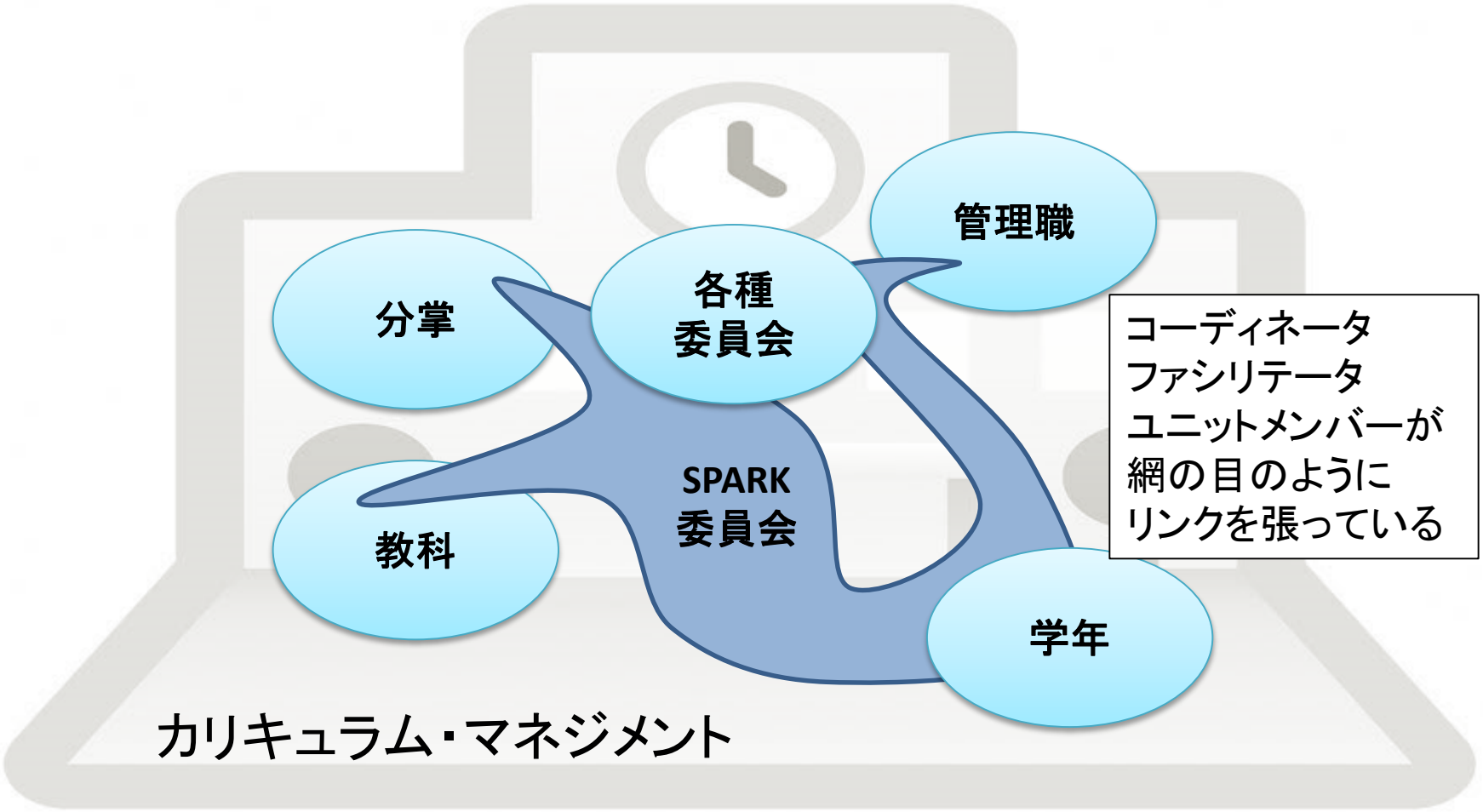
大学との連携

成果の普及（発表）

学習環境の整備

Webページ

SPARK委員会の独特な立ち位置



学校組織の隙間に入り込んで、
個別の実践を表面化、調整、共有、発展させている。

保護者や
地域社会

社会に開かれた教育課程

高大接続

組織文化の形成

チーム学校

**資質・能力の育成は
学校全体で取り組む
必要がある。**

＜授業改善＞
教科横断的
汎用的能力の育成

H28～H29
AL（道指定）

＜組織運営の改善＞
教科等の縦割りや学年を
越えて学校全体の取組
を生み出す環境づくり

アクティブ・ラーニング

カリキュラム・マネジメント

学習指導要領による
カリキュラム・マネジメントの定義

生徒や学校、地域の実態を適切に把握した上で、

ア　教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。

イ　教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

ウ　教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

ここでいう「教育課程」とは、教育課程表のことではなく「学校教育活動全体」を指す。

本校におけるカリキュラム・マネジメントの例

（例１）育成を目指す資質・能力の策定
資質・能力ユニット→研修会→教務部から全体へ提案

（例２）教育課程編成
教務部内教育課程ユニット→　アンケート→　ユニット原案
→　教科→　教務部内３クループ→　教育課程委員会（教科）
→　学年→　・・・

（この他にも）
分掌・学年・教科等で業務を企画・運営する際に
カリキュラム・マネジメントの視点が入っているはず。

「札幌北高におけるカリキュラム・マネジメントの定義」
学校教育目標に基づき、生徒の資質・能力を育成するために、
組織的・計画的に教育活動を振り返り、その質の向上を図っていく取組

本校におけるカリキュラム・マネジメントの捉え方

ブレインズオン　（brains-on)

熱心に考え、もがいている状態

文献13)より

組織的に振り返る

資質・能力を育成する

生徒の学びの質を高める

教員もブレインズオンの状態に

このために必要なのはカリキュラム・マネジメントの

「型」ではなく「視点」

「札幌北高におけるカリキュラム・マネジメントの視点」は？

生徒の資質・能力を育成するために、組織的・計画的に
教育活動を振り返り、その質の向上を図る
（取組ありきではない）

① 教員が、組織的・系統的な教育活動の中で、

② 必要と思われる時期に、

③ 生徒や学校の実態に応じて、

④ 効果が出ると想定できる場合に、

⑤ 適切な組織のもとで、教育活動を振り返り、質の向上を図ることで、

⑥ 生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現し、

⑦ 入試学力を含む、「本校で育成を目指す資質・能力」を学校全体で育成する。

⑧ その形態は多様であるはず。

「カリキュラム・マネジメント」の解釈について

カリキュラム・マネジメントを実践している分掌・学年・先生が、なぜ、自分はしていないと言うのか？

PDCAサイクルなどの特定の「型」があると思っているから

この意味から本校では
「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた取組」
という名称を使ってはどうでしょうか？
カリキュラム・マネジメントの形態は多様であるはず

↓

「取組の結果、教員が疲弊するだけ」は避けたい
「生徒の成長を考える」 ことが大切

令和元年度までの主な取組

(1) SPARK委員会・ユニットの活動
(2) 学びに関する校内研修会の実施
(3) 国際理解教育の推進
(4) 総合学習の改善（探究学習の推進）
(5) 学校説明会の工夫・改善
(6) 本校生徒に求める16の資質・能力の決定
(7) ふるさと応援事業への参加
(8)「総合的な探究の時間」の工夫改善(ユニット)
(9)「評価」の検討・研修(ユニット)　　他

カリキュラム・マネジメントの視点を用いた学校全体の活性化を目指す

令和2年度の取組(予定)

(1) 「ICT」環境の整備及び活用の検討・研修(ユニット)
(2) 「総合的な探究の時間」指定事業の活動
(3) 「観点別評価」の検討

研究指定に関する取組について

「探究」を軸とした学びの関連付けにより、本校生徒の資質・能力の向上を図る。（全体像の共有化）
⇔教務部探究ユニット・学年総合担当との情報共有を目指す。

主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた学習・指導方法の工夫・改善を一層推進する。（個別の学びの共有化）
⇔ICTの取組も含め、多くの先生の日常の取組を共有する。

学習評価（主体性評価・観点別評価）の在り方を検討する。
⇔各教科で指導要録にABCを記載・教務との連携が必要

年に1度の研究協議会の実施（R2は実施せず）
⇔本校における取組を発信する中で、北高Standardの確立を目指す。